

第139回くらしの植物苑観察会 2010年10月23日(土)

佐倉城址の秋の植物

原 正利(千葉県立中央博物館 生態・環境研究部長)

今年の夏はひどい酷暑でしたが、その暑さもやわらぎ、野外を散策するには良い気候となってきました。秋の遅い千葉県では、まだ紅葉の季節とはいきませんが、野外では、夏の暑さを乗り切った植物たちが実をつけ、花を咲かせています。くらしの植物苑と佐倉城址の一角を歩きながら、これらの植物の形態や生態について、やさしく解説します。どのような話になるかは当日の成り行き次第という面もありますが、予定している説明のいくつかは以下のとおりです。

ザクロ *Punica granatum*

くらしの植物苑ではザクロ(石榴)が実をつけています。ザクロはミソハギ科に属する小高木で、原産地はバルカン半島周辺からインド西北部の半乾燥地域と考えられていますが、大きく甘酸っぱい果実が魅力的なことと、薬効(サナダムシなどの駆除剤)があることなどから、世界中で広く栽培されてきました。熟した果実が割れ、中から多数の真っ赤な種子が出現する様子は強烈なイメージを与えるようで、古代からの民間伝承に、数多く登場します。ギリシャ神話やローマ神話にも現れ、不死や子孫繁栄、豊穡の象徴として扱われてきました。植物形態学的に見ても、その果実は特殊なもので、わざわざ“ザクロ状果”という果実の形態区分が設けられているほどです。ザクロ科という1属2種の科として扱われることもあります。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia*

佐倉城址にはオニグルミが沢山、生えています。くらしの植物苑にも植えられています。本来の自生地は川沿いの湿った場所です。佐倉城址のクルミは台地の上にも生えているので、植えられたものかもしれません。果実は5cmほどの楕円形で、緑色の果肉にはタンニンが多く含まれています。落下すると果肉は黒変して腐り、中からいわゆるクルミの実が現れます。植物形態学的には、しわのよった硬い殻の部分は内側の果皮(内果皮)で、その中に詰まっている食用となる部分が種子です。ウメやモモの“たね”と同じ構造です。硬い殻に包まれたクルミの実は、水に浮き、川の流れに乗って下流へと運ばれます。海岸でクルミの実が打ち上げられているのを見ることがあるのは、このためだと思われます。

サンザシ *Crataegus cuneata*

サンザシは中国中南部原産のバラ科の植物で、日本へは江戸時代中期に薬用植物として導入されたのが最初とされています。健胃、消化、止血、痛み止めなどの薬効があります。また食用となり、その実と砂糖を混ぜ合わせて作ったお菓子は、中国人の最も好むお菓子のひとつです。実は植物形態学的には偽果と呼ばれ、がくの根元の部分が膨れて中の果実を覆ったものです。実の中に入っている複数の“たね”が、実は1個1個の果実に相当します。このような構造はバラ科の植物に多く見られます。

.....

次回予告	第140回くらしの植物苑観察会	2010年11月27日(土)
	「文芸作品にみる菊見」(平野 恵)	さいたま市大宮盆栽美術館)
	13:30~15:30(予定)	苑内休憩所集合 申込不要